



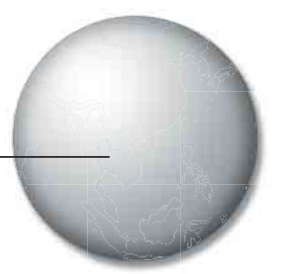
「ゴールデン・トライアングル」と呼ばれるタイ国境沿いにあるドイトウン地区の風景

FIELD SKETCH

アジアに「知的リーダー・ネットワーク」を

この春訪れたタイで、日本を開発の重要なパートナーと考える2人のタイ人に会った。一人は日本の伝統を生かしたものづくり技術を若者に伝え、タイを「東洋のデトロイト」にしたいと意気込む泰日工業大学のクリサダー学長。他の一人は麻薬地帯「ゴールデン・トライアングル」を舞台に、20年がかりで、山岳民族を転作農業と嗜好品作りで自立させ、一帯を「観光都市」に変身させたメルファールアン財団のクン・チャイ理事長。2人との対話を通じて「人的ネットワークによる国際協力」の重要性を考えた。

文 = 尾崎 美千生 (ジャーナリスト)
text by Ozaki Michio



タイ
THAILAND

アジア地域の知的交流を 活性化させる試み

JICAは今秋、アジア各国から将来のリーダーと目される若手政治家や官僚を日本に招いて「アジア地域知識経営セミナー」を開き、日本とアジアとの「人的ネットワーク」を重視した開発戦略づくりを本格化させる方針だ。このほど米国の「ウォール・ストリート・ジャーナル」紙で、ピル・ゲイツ・マイクロソフト会長らとともに「世界で最も影響力のある経営哲学者」の一人に挙げられた野中郁次郎・一橋大学名誉教授(73)による日本の伝統を生かした

新しい知識創造の理論やリーダーシップ論と、メルファールアン財団のクン・チャイ理事長(68)が築き上げた「人間中心の開発」プロジェクトの実地見学を通じて、日本とアジア地域との知的交流を活性化させる考えだ。

元日本留学生、 クリサダー・泰日工業大学学長

バンコク市内の泰日工業大学で会ったクリサダー・ウイサワティラソンさん(57)の人なつこい笑顔からペラペラの日本語が飛び出した。1970年代の初めに京都大学で電気工学を学び、帰国してからチュラロンコン大学で日本仕込みの技術を教えた。今でこそトヨタをはじめ約1300社の邦人企業がタイに進出しているが、70年代後半

イ側では泰日経済技術振興協会(TPA、73年)が立ち上がった。そのような日・タイ経済界の歴史的な流れの上に2007年に泰日工業大学が開校、クリサダー氏に学長として白羽の矢が立った。この動きを側面から促進したのが、日本留学経験者でつくる同窓会だった。



「ウォール・ストリート・ジャーナル」紙に「世界で最も影響力のある経営哲学者」20人の1人に挙げられた野中郁次郎氏

には日本の経済進出に対する警戒感から経済摩擦も頻発した。

しかし日本の大学への留学組や、東京、横浜、中部、関西各地に置かれた(財)海外技術者研修協会(AOTS)で学んだタイ青年の間で、日本で身に付けた知識や技術を生かしてタイ産業の発展に貢献できる仕事をしたいとの要望が高まった。こうした空気を受けて日本側では(社)日・タイ経済協力協会(JTECS、72年)が、またタ

クリサダー氏は「京都大学に留学して、日本は経済だけの国ではないと思った」と日本への思い入れの原点を語る。泰日工業大学は工学部、情報学部、経営管理学部、大学院で構成されるが、日本語の学習を義務付けている。昨年開かれた「ニュービジネススプラン・コンテスト」で大学院生5人が出品した生ごみ処理機「バイオ・ダイジェスター」が優勝、賞金20万バーツを獲得した。クリサダー氏は「ものづくりにはコンピュータの力だけではなく、日本人が得意とする手づくりの技術や、何よりも心がこもっていないと」とクリクリとした目玉をさらに見開いた。タイ国内や日本へ、質のよい技術者を送り出したいという。日本

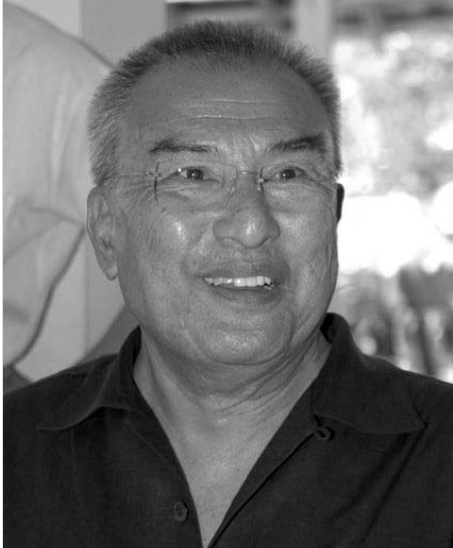


2007年、バンコクに開校した泰日工業大学。工学部、情報学部、経営管理学部、大学院で構成される

本の留学制度にはさまざまな議論もあるが、タイにおける元日本留学生の働きは福田起夫・元首相の「福田ドクトリン」以降、一層活発化した留学生招聘の成功例の一つといえるだろう。



泰日工業大学のニュービジネスプラン・コンテストで優勝したバイオ・ダイジェスターの模型とクリサダー学長



「コンピューター付きブルドーザー」さながらのエネルギーで、ゴールデン・トライアングルを再生したクン・チャイ氏

麻薬地帯「ゴールデン・トライアングル」を変えた男

タイ北部から、ミャンマー、ラオスに国境を接する山岳地帯に広がる「ゴールデン・トライアングル」。世界最大のケシ栽培とヘロイン生産で世界の6割を占める麻薬の拠点として知られてきた。麻薬はタイや中国などを經由して世界中に密輸され、巨額の利益を生み出すことから「黄金」の名が冠せられた。しかし、麻薬生産に伴って常習者による家庭崩壊や人身売買、売春など社会悪の巣窟にもなってきた。

タイ国境沿いのドイトウン地区に約20年前から、山岳民族にお茶やコーヒー、ナッツなどの代替作物を普及させ、地域丸ごと生

き返らせたのがクン・チャイ氏である。同氏は、秘書を務めた現国王の生母が麻薬に頼る山岳民族の貧困と悪習の悪循環を変えるために設立したメルファールアン財団を引き継いだ。

財団が経営する阿片博物館、美術文化公園、百の花咲き乱れる庭園などの風景の中で出会ったクン・チャイ氏は、エネルギーの塊だった。日焼けした顔で160センチ足らずの短軀から吐き出される言葉はまるで機関銃、ここにもう一人の「コンピューター付きブルドーザー」を見る思いがした。20年かけて築き上げた開発プロジェクトは、大胆に見えながら実は慎重なプロセスを踏んできたことが間もなく分かった。ブルドーザーと見える機械の底辺には野



ドイトウン地区では、ケシに替わりお茶やコーヒー、ナッツなどの作物が栽培されている

中郁次郎氏が説く経営戦略の中心概念である「賢慮」(ブルードレンス)が働いていた。

クン・チャイ氏とその経営陣がこれまで進めてきた「ドイトウン・プロジェクト」に、その足跡がそっくり残されている。

アカ族などの山岳民族が焼き畑農業で生産してきたケシ栽培からコーヒー、お茶、マカダミアナッツへの切り替えには、山に分け入り、繰り返し麻薬生産との損得を説いた。やがて池の魚や豚の飼育、花の育苗、森林育成と、一歩一歩山歩きのような足運びで地域を変えた。次には工場を建て、少数民族の伝統技術を活用した織物、紙すき、陶器に手を広げた。専門的なデザイナーの指導で、これらの中からバンコクの街中でファッションショーが開けるまでに品質を上げた。気が付いてみると、焼き畑で荒れ果てた山々は野菜と木々で自然の美しさを取り戻していた。新しいプロジェクトが始めるときは、家族や友人で組織したシンクタンクで慎重にその可能性を探った上で着手している。

「バリュー・アディング」が重要な経営戦略だ。「付加価値をつける」手作りの粗品から、専門家の知恵を借りて都会の消費者の関心を引き付け、マーケットに乗せる。しかし、草の根の発想から立ち上がったド

イトウン・プロジェクトは、「人間中心 (people centered) の開発を忘れない」とクン・チャイ氏は繰り返す。こうして創り上げたドイトウン・プロジェクトをアフガニスタンや、ラオス、インドネシアのアチェ、ミャンマー、ベトナムの地に伝播させたいと彼は考えている。そのため日本の農業や、ものづくり、企業

経営の知恵を学び合いたいと望む。

JICAがタイなどアジア7カ国から意欲的なリーダーを招き、すっかり意気投合した野中郁次郎氏とクン・チャイ氏が協力するこの秋の「アジア地域知識経営セミナー」が、アジアの地に根を張り、花を咲かせるか、10月に誕生する「新JICA」の力量が問われる。

FIELD SKETCH



(上)陶器工場でデザインの筆を入れる女性
(下)ドイトウン・プロジェクトでつくられた織物工場、伝統的な糸紡ぎ機を操る女性たち